55

医史学教育の可能性
――順天堂大学医学部医史学研究室M3ゼミナールでの実践――

月澤美代子
順天堂大学医学部 医史学研究室／順天堂大学大学院 医学研究科

順天堂大学医学部のカリキュラムには，3年次に「基礎ゼミナール」と名付けられた集中ゼミが組まれている．学生たちは希望に応じて，医学部の基礎講座・研究室に5週間配属され，基礎医学の教員に直接付いて指導を受けるが，この期間，他の講義・実習等は組まれておらず，学生たちは，この基礎ゼミでの課題に集中的に取り組むことができる．ゼミで行う内容は，実験，調査研究，文献読解など，講座，研究室の特性に応じて極めて多様である．臨床現場で役立つ実践的な医師を育てるために，現在，医学部のカリキュラムは基礎・臨床を統合した内容で構成されているが，基礎と臨床のどちらに重点が置かれているかによって前半と後半に分けることができる．3年次の基礎ゼミは，前半の基礎に重点をおいた講義・実習を終えた後に設定されており，それぞれの学生が自分自身の問題意識に応じて，関心をもったテーマを深く探究したり，将来，必要とするスキルを身につける機会として機能している．

医史学研究室にも，例年，希望する学生が配属され，自らの設定したテーマを熱心に追求してきた．私は，着任以来，学生たちの指導に直接あたってきたが，主担当者として学生を指導してきた最近13年間の具体的な実践の内容を紹介してみたい．

医学部の教育はコア・カリキュラムに添って行われている．平成22年度改訂の「医学教育モデル・コア・カリキュラム」には，「A. 基本事項」に「4. 課題探究・解決と学習の在り方」が設定されており，このうち「(1) 課題探究・解決能力」は，一般目標として「自分の力で課題を発見し，自己学習によってそれを解決するための能力を身につける」ことを示している．順天堂大学の基礎ゼミナール自体，こうした「学生が自ら設定した課題を自ら解決する」能力を育成し，研究の楽しさを実体験するためのカリキュラムとして設定されてきたが，医史学研究室は，幸いなことに，この理想的な「場」として機能してくることができた．毎年3～5人，13年間で計54人の学生が配属されてきた．テーマは古代ギリシャのヒポクラテスの医療倫理から，ナポレオンの軍医のラレーによる救急医療，現代の医療訴訟，アートセラピー，性同一性障害，災害医療，「こうのとりのゆりかご」まで多岐にわたり，全て異なるテーマである．学生と担当教員が対話を重ねながら，一人一人の問題意識を掘り起こし，学生自身がテーマを設定し発展させてきたのが，その理由である．テーマ設定範囲の条件は2つ，すなわち，「医療」そして「人間」が関与するものであること．「歴史」は必須条件としていないが，医史学関連のテーマ設定をする学生が多い．実験系の講座においては装置やスキル，さらには講座自体の研究課題によって学生の選ぶテーマはかなり限定される．しかし，医史学においては，史料の解読能力や語学力など一定の制約はあるとは言え，学生自身の問題関心に応じて，相対的に広い範囲からテーマ設定していくことが可能である．5週間のうち，1週目には，一人一人のテーマ設定を詰めていきながら史料探しのノウハウを教える．学生たちはネットで検索した上，自ら学内外の図書館や史料館に出向いて史料探しを行い，研究デザインを作成していく．2週目からは，徹底して史料の読み込み．可能なかぎり一次史料にあたらせ，思いこみを排し，小さくても良いから一次史料に基くオリジナルな「発見」を行わせる方針で個人指導をしている．4週目からはコンストラクションを重視した論文の書き方指導．学生はそれぞれ16,000字の論文を作成し，5週目の最後には，パワーポイントを使って他講座と合同の発表会で口頭発表を行う．タイトな日程だが，学生たちと共に学びながら，医史学研究の楽しさを味わえる極上の5週間である．